

金子文子 — 「運命」からの脱却—

安元隆子

Takako YASUMOTO. A Study on Kaneko Fumiko — Break away from destiny—. *Studies in International Relations* Vol.41, Consolidated Edition. February 2021. pp.51-60.

Kaneko Fumiko denied the emperor system because of “absolute equality of human beings”. And she hung herself in prison, sticking to her ideals. Her prison memoir was titled “What made me do this” is effective for understanding the process of her thought formation. In this prison memoir, Fumiko is fighting against unreasonable reality. It turns out that she was at the mercy of her sexual instinct when she was younger woman. And she believed in her destiny while hating the destiny theorists, one of which was her father. And it turned out that Fumiko also has vanity that she regarded this as a characteristic of the destiny theorists. But the time had come to break away from both destiny and vanity. This paper reveals the transformation of Kaneko Fumiko on the expression of her prison memoir.

【はじめに】

金子文子は1903年、この世に生を受けるも両親の愛情に恵まれたとは言い難く、父・佐伯文一が文子を戸籍に入れなかったため、幼少期は無籍者の悲哀を味わった。1912年に親類に引き取られ朝鮮半島に渡るが女中同然の暮らしを強いられ、1919年に帰国。その後、上京して新聞売りや露天商、奉公をしながら苦学し、不条理な現実の中で辛酸を舐めた結果、社会主義を経て無政府主義、虚無思想に傾倒していく。そして、「人間の絶対平等」を阻む天皇制を否定した。1922年、思想的な共感から朝鮮人の朴烈と知り合い同棲するが、関東大震災の際、朴と共に保護拘束される。取り調べの中で朴の爆弾入手計画が露見し、刑法73条に触れるとして大審院管轄事件となり、朴と共に死刑判決を受ける。恩赦により無期懲役となるも1926年、金子文子は獄中で縊死を遂げた。

こうした金子文子の生き方は帝国主義時代の日朝関係の中で朝鮮人と連帯した数少ない日本人として、また、当時の男尊女卑的な社会通念の中で朴と営んだ男女平等な共同生活については女性史の観点からも注目に値する。最近では、2018年に韓国で映画「朴烈」¹が封切られ、翌年、日本

でも上映され静かなブームとなり、これまで金子文子の存在を知らなかった人々にもその存在を知らしめた。

この金子文子が獄中で書いた手記が『何が私をかうさせたか』²である。判事の「過去の経歴について何か書いて見せる」（「手記の初めに」）ということばに従って執筆したという。「『事実の記録』として見、扱って欲しい。」（「添削されるについての私の希望」）という言葉が示すように、文子が自らの人生を凝視して書いた書である。この手記は、これまでの先行研究である、山田昭次の「自己の生活史を語る方法で、国家によって死刑にされても自己を放棄できない理由を暗に伝えた」³という指摘や、李順愛の「自分が何故天皇に屈服しないのかを自問した時に、最後の最後に残ったのが、知識などではなく、自らのこれまでの人生そのものであった」⁴という言葉が示す通り、なぜ大逆罪と見做される思想を持つに至ったのか、真摯に己の思想形成過程を追った金子文子の自己探求の書である。

金子文子の思想形成過程の検証のためには残された予審、大審院での尋問調書が大きな意味を持つ。これに対し、獄中手記『何が私をかうさせたか』は、これまで金子文子の思想解明のために尋

問調書を補う補助資料として読まれてきたように思う。しかし、この獄中手記は尋問調書から読み取れる文子を巡る事実や理路整然とした彼女の思想だけではなく、金子文子の心の弱さ、惑い、醜さも曝け出した部分が存在する。本論はこの部分に着目し、この手記を表現の細部にこだわり読むことで立ち現われてくる人間・金子文子を形象化する。そして、文子が自らの弱さ、惑い、醜さ、といった負の部分——それは具体的には性の本能に引きずられ、また、運命を享受してしまう弱さであり、自己をよく見せ取り繕う見栄や虚栄心であった——をどのように克服し、思想を屹立していったのかを明らかにする試みである。

尚、本論における引用は『何が私をこうさせたか——獄中手記』（2017年、岩波文庫）による。引用の末尾にページ数を示した。

【わけのわからぬ力】

「依頼心の深い母だ。それに、男なくしてはいられぬ女だったに相違ない」(p.55)という言葉が端的に示すように、男に依存し、性に弱いのが文子の母・きくのであった。文子の父・佐伯文一に捨てられた後も、何人もの男と同棲し、時に自らの性欲のために幼い文子を夜の闇の中に使いに出し、帰宅した文子は母親の性行為の場面を垣間見ることになる。また、文子の母は小林という生活力のない男ともつき合うが別れたいと考えていた。しかし、すでに妊娠しており、ほおずきを使って墮胎を試みたものの失敗したために、小林の郷里での生活を余儀なくされる⁵。結局、山村の極貧生活から逃れるために産んだ娘を置いて小林と別れたのが文子の母である。彼女の不幸はすべて性に引きずられる弱さと男性を見る目の無さ、主体性の無さが災いしている。問題なのは、文子の母の依存体質は男性に対してだけではないことだ。再婚話に対し、母は次のように言う。「げに嫌だったら無理に苦労して御厄介になっていなくても、そうとなりゃこの子がいるから心丈夫だあね」(p.86)。この言葉が示すように、母は男に依存しているだけでなく、娘にも依存しようとしている。この母の存在は反面教師として文子の自立

への想いを強めたと思われる。しかし、この母の性に引きずられる弱さはどうであろうか。もちろん幼い文子はそれに嫌悪感を抱いたが、実は、文子の中にも母のように性の本能に引きずられる弱さがあったのではないか。文子の性を振り返ってみる。

彼女の性の目覚めは朝鮮からの帰国後、故郷の叔父に抱いた感情がそれだと言える⁶。叔父の名は元栄。生活の安定を考え寺に弟子入りし、修行の途中、寺を飛び出し船員となり旅に出て寺に戻った破壊僧である。文子の帰国時には元栄は文子の母の実家・金子家の隣の寺の娘・千代と恋仲になっているが、それを知らずながら文子は元栄に惹かれる。それは元栄がこれまで周囲になかった知的な雰囲気を持っていたということもあったが、「私の生命のうちには何かしら異性を求むるものが芽生えていたのには相違ない」(p.226)からである。文子は「何か理由のわからぬ力に引きずられる心地」(p.240)で叔父の寺へ通うのであった。そこに父親の金銭的な打算が加わり、叔父と姪との結婚が画策される。文子はそれを拒否しない。なぜならそこには次のような認識があったからだ。

無理に目覚めさせられた若さの寂しさとても言おうか、私の心のどこかしらに充されない寂しさがあった。それが何であるのか解らないながらも、しかも何かしら求めたい気が私のうちに絶えず燃えているのであった。
(p.244)

元栄は一方で千代と情を通じていながら、他方で文子との結婚を父に約束する。千代は自分で夫を選ぶことができず、元栄と別れ親の命じるままに品物のように扱われ他家に嫁がされた。それから半月も経たないうちに、元栄はまた他の女を漁ろうとしただけでなく文子の肉体も奪ったのである。だが、元栄は文子の素行を問題視し、結局、結婚話を反故にする。というのも、文子はこの頃知り合った青年・瀬川の欲望を振り払うことをしなかったからだ。文子自身次のように語る。

私はその時多分にこの青年の目的とするものを感じていた。が、思いきってそれをはねとばすことができなかった。なぜなら、私に

もその頃何かしらわけのわからぬものへの憧れが渦巻いていたからだった。(p.245)

四つ五つの時分から、だらしのない性生活の教育をうけて来た私である。不自然な性の目覚めに誘き出された私である。その私が、もう十六にも七にもなって、自分にもわからぬある不思議な力にひかれて、何ものかを憧れもとめたことに、何か重大な罪悪でも秘んでいたと、父や叔父は言うのであるか。(p.264) この「何かしらわけのわからぬものへの憧れ」や「わからぬある不思議な力」は文子の体の中に潜む本能的な性の衝動に違いない。文子は母親の性のだらしなさを批判しているが、文子自身も本能的な性の欲望に突き動かされて行動しているのである。

このような性に引きずられる文子を象徴するエピソードがこの後にも登場する。それは上京後、苦学をする中で知り合ったクリスチャン・伊藤との交際である⁷。

そうして私は、何だかわけのわからぬ力に引きつけられて行くのであった。ふと気がついてみると、私はもう、小隊長の足下にまで進んでいた。私は小隊長の脚下の床に突伏して、ただわけもなく泣いた。(p.318)

伊藤に惹かれた文子が教会に行き、その場にいた信者と共に神を賛美する場面である。しかし、彼女の信仰は、情緒的な雰囲気感化されたものであり、性と同じく「わけのわからぬ力」に引きずりこまれたからなのである。こうした入信体験の背景にあるのは伊藤という存在に他ならない。文子は神を信じていたのではなく、伊藤の関心をひくために教会に近づいたのである。祈りも奉仕も彼が勧めるからなのであり、心の底から神を信じたからではなかった。

私は奇蹟を信じられなかった。(中略) 私にはそれらが信じられないにもかかわらず、私はただ伊藤に信頼して教会にも行けば、祈りもし、また、他人に奉仕するために朝早く起きて、黙って宿の便所の掃除までもした。—それも、伊藤がそうしろと言ったからで……。 (p.333)

このように男性に引きずられる文子は、嫌悪した

はずの母親と同じ道を辿っている。

しかし、そのような文子にも覚醒する時がやってくる。それは身体を許した男たちの裏切りにあった時である。叔父の元栄にもてあそばされた挙句に破談にされ、本能的な性の欲望からつきあった瀬川も自分の肉体だけを求めていたことに気付く。妊娠を恐れ、また、心のどこかでそれを期待していた文子に対し、瀬川は「子供が出来たらどうするかだつて？ 僕はそんなこと知らないよ……」(p.361)と語り、文子は結局おもちゃにされていたのだということを痛切に悟るのである。このような男性経験の躓きは瀬川だけではない。朝鮮人留学生の活動家・玄にも結局は捨てられる。こうした経験を経て、金子文子は次のように考える。

人々から偉いといわれることに何の値打ちがあるろう。私は人のために生きているのではない。私は私自身の真の満足と自由とを得なければならぬのではないか。私は私自身でなければならぬ。

私はあまりに多く他人の奴隷になりすぎてきた。余りにも多く男のおもちゃにされてきた。私は私自身を生きていなかった。

私は私自身の仕事をしなければならぬ。(p.388)

ここには「私」自身を生きることに目覚めた金子文子がいる。こうした「私」自身を生きることへの志向は同時に「運命」からの脱却という物語と重ねることが出来る。

【運命からの脱却】

文子と「運命」を考えるために、初めに無籍者の悲哀を味あわされることになった父の造形を確認する。

「人には運というものがある。それが向いて来ないうちはどうにもならないものだ。これが迷信家の私の父の哲学であった。」(p.27)「いつもの運命論をかつぎ出して」(p.29)というように、父は運命論者であり、迷信家として登場する。父は一向に上向きにならない生活ぶりを嘆き、そこから脱却するために母の妹・たかのに、櫛を髪に

つけさせそれを振り落としてくるように命じるのだ。「言われるままに叔母はその折れた櫛を挿して出かけて行った。そしてものの五分と経たないうちに櫛を振り落して叔母が帰って来た」。(p.28) 父親が文子とその母・きくのを捨てるきっかけになったのが母の妹・たかのである。どちらかと言えば鈍重なイメージのきくのに対し、たかのはてきぱきと利発であったようだが、そのたかのもこのような非科学的な迷信を信じている。たかのだけではない。この運命論は文子が上京した際に世話になった東京の叔父の成功の理由について語る際にも適用されている。「もっともこれには妙なことから「運」も手伝っているにはいるのだ。」(p.284) というように。つまり、父をはじめとして文子の周囲の人間の大部分は自ら人生を開拓せず、受動的な生き方を是とする「運命」論者として登場している。そして、迷信を信じている。この『何が私をかうさせたか』において、「運命」を信じる者は「迷信」を信じるというように、両者の共存はある範疇の登場人物に共通する心性としてある。

こうした文子の周囲の運命論者の中心に位置する父の様子は次のようにも描かれる。

父は今もなお大の迷信家らしく、居間の壁には、天井裏に近く棚が吊ってあって稲荷さんだとか荒神さんだとかが祀られてあり、毎朝それに向かって礼拝をしているのだった。(中略)「唯是天命」という軸が掛っていた。これも「運」信者であった父の迷信哲学が、今にまだそのまま残っているものといっているであろう。(pp.229-230)

こうした天命を受け入れることを掲げた運命論者であり迷信家でもある父は、同時に系図を重んじる人間である。「佐伯家系図」の前に家族を座らせて、その系図に礼拝させ、太政大臣藤原の何とか卿の百二十三代を辱かしめてはならぬと、家族に氏族制度時代のふる臭い思想を吹き込んだり精神的な重荷を負わせたりするのだった。

先祖代々の系図を糧に自己存在を保ち、この系図こそが自己の威信の正当性を示すとする父の姿勢は、文子が掲げた人間の絶対平等の思想の前に立ち足る天皇制と重っている。戦前の天皇制

が神代にまで遡り、万世一系であることを根拠に国民に絶対的な権威を持って君臨したことは次の「尋常小学修身書」の一節からも明らかである⁸。

昔天照大神は御孫瓊瓊杵尊をお降しになって、此の国を治めさせられました。尊の御曾孫が神武天皇であらせませす。(略)神武天皇の御即位の年から今日まで二千五百八十余年になります。(略)世界に国は多うございませす、我が大日本帝国のやうに、万世一系の天皇をいただき、皇室と国民が一体になってゐる国は他にはございませせん

迷信家で系図を重んじる父親はまさに「皇国史観」と相似形をなす存在として形象化されているのであり、子どもたちを系図の前に座らせそれに最大の敬意を払わせようとする教育は、「皇民教育」「臣民教育」と酷似しているといえるだろう。また、同時に父親が家族に君臨する家父長制が天皇制と相似形であることを端的に示す部分でもある。こうした天皇制の在り方を「迷信」と呼んだのはむろん文子が初めてではない。明治末期の幸徳秋水をはじめとする社会主義者、そして彼らの思想の影響を受けた石川啄木も天皇制の本質をこの「迷信」という言葉で表現していた⁹。

金子文子はこのような天皇制と相似形を成す家父長制の中に君臨する父親に激しい嫌悪感を抱いている。しかし、父親が絶対視する「運命」に反逆したのであろうか——。否、金子文子は父親たちと同じように、「運命」を享受していたというしかない。幼いころの横浜での記憶には「私を来るべき苦しみの運命に縛りつけるための、自然の悪戯であったのだろうか、」(p.24)とある。そして、父親に連れられ文子と母親から引き離されていく弟との別離に際し「それは私には運命のようなものであった」(p.44)と文子は書いている。また、朝鮮時代に虐待を受けた際、

「ああ、もう仕様がなない！」私は思わず溜息をついた。そして「ええッどうにでもなれ」といった風に自分の身を運命に任せてしまった。(p.168)

とあるように、文子は「運命」に反発するのではなく、嫌悪する父と同じように「運命」に身を任せ、同調しているのである。前述したように、性

に弱く男に依存する母を嫌悪していたものの、母親と同じように性の本能に引きずられ、男に弄られ捨てられた文子であったが、同じ様に文子の内面には「運命」論が巣くっていたことを見落としてはならない。しかし、この「運命」からの脱却を図る時がやってくる。

生まれ落ちた時から私は不幸であった。横浜で、山梨で、朝鮮で、浜松で、私は始終苛められどおしであった。私は自分というものを持つことができなかった。けれど、私は今、過去の一切に感謝する。私の父にも、母にも、祖父母にも、叔父叔母にも、いや、私を富裕な家庭に生まれしめず、至るところで、生活のあらゆる範囲で、苦しめられるだけ苦しめてくれた私の全運命に感謝する。なぜなら、もし私が、私の父や、祖父母や、叔父叔母の家で、何不自由なく育てられていたなら、恐らく私は、私があんなにも嫌悪し軽蔑するそれらの人々の思想や性格や生活やをそのまま受け容れて、遂に私自身を見出さなかったであろうからである。だが、運命が私に恵んでくれなかったおかげで、私は私自身を見出した。そして私は今やもう十七である。(p.279)

ここにおいて文子は、過酷な境遇をもたらした自己の運命を呪うのではなく、自己に鍛錬の場を与えてくれたことに感謝するという一段上の精神の高みを見せている。文子がかつといろいろな本を読み、いろいろなことを知り、自身の生命を伸ばせるだけ伸ばし、一人前の人間として好きな道を歩むには経済的自立が必要であった。そのために文子は東京へ上京することを決心するに至る。

このように、金子文子の人生はひとまずは不幸な運命からの脱却の物語であったということができる。だが、そう単純には終わらない。運命や迷信という言葉に付随して表れている「見栄」と「虚栄心」ということばに注目して、再度、金子文子の人生を振り返る。

【見栄と虚栄心】

父親と共に暮らす叔母・たかのに対し、不思議と文子は恨みを抱いていない。実の母親に比べ

しっかり者で、自分の姉に対する不義理をいたく感じて父親を奪うことになった文子へのたかこの愛情は深く、文子もまたその想いを十分に理解していたようである。たかのに対して文子は非難めいたことは一切書いていない。しかし、そのたかのに対しても断絶を感じている箇所がある。それは貧しさの中で叔母が通称「天ぷら」と呼ばれる金メッキの指輪をつけ、満足げに文子に見せびらかした時のことである。文子は次のように思う。

ああ、叔母もとうとう、父に感化されてしまったのだ。どうしてこの人達は、こんなさもない見栄坊なんだろうと、帰って来るなり私はこの人達に不快を感じた。(p.249)

文子は、運命論者である父は同時に見栄張りであり、虚栄心の強い人間であったと書いている。それは次のエピソードにも明らかだ。

文子が父の家を訪ねた時のこと、弟の進学が決まる。父は女である文子には裁縫学校に通わせるだけでそれ以上の学問を付けさようとはしなかったが、弟の賢は大学に進学し法律家になって「出世」することを願っていた。その門出というべき県立中学に合格した祝いに買った靴の値段についてさばを読み、高価にみせかけたことが露見した。しかし、あくまでも取り繕い、見栄を張る父に対し、文子は次のように思う。

お父さんみたいにくだらん見栄をはる人間ったらありゃしないよ。(p.272)

父の家の空気は二年前も三年前も同じであった。父のひとりよがりや、虚栄心や、さもない見栄や、けちな量見は、事ごとに濃厚に表われて、いちいち私をくさくささせるばかりであった。(p.357)

このように見栄を張り、虚栄心に満ちた父を嫌悪する文子であるが、実は文子の中にもこの嫌悪する「見栄」が存在していたことを見逃してはならない。まず、朝鮮時代に父方の祖母の虐待を受け、窮した文子は盗んだ祖母の家の米を市場で売り金に換えようとするが、それが容易にできなかった。その理由は村のおかみさんたちがやるのと同じようなことはしたくないという「私にもやはり見栄があるから」(p.189)という場面である。それだけではない。上京後、露天商をしている時

の文子の心性がよく表れている次の場面に注目したい。

こうして私がわざと男の学生と一緒にいるような学校を選んだのは、(中略)浜松の女学校で学び得た経験上、女ばかりの学校は程度も低いし、生徒も教師も学問には熱心でないから、そんな仲間入りをしているのは進歩が遅いと思ったからである。(中略)男の学校に這入って男と机を並べて勉強するということは、一方で普通の女より一段と高い才能を持っているような気にもなり、他方では、男と競争しても負けはしないぞといったような男子に対する一種の復讐的な気持ちも加わっていて、自分にもはっきり意識しない虚栄心もそれに手伝っていたのである。(pp.292-293)

これは上京後、女医を目指して受験勉強をすべく、研数学院に学んだ時の感慨である。文子の中に潜む無意識の男尊女卑の考え方が露見している。そして、それと同時に男性に対する復讐心を燃やしているが、それらを「自分にもはっきり意識しない虚栄心」によるものと述べている。実際に苦学生として学校に通っているときにも同様の感情が起こっている。「自分も苦学をしているのだという一種のヴァニティーも手伝って私は急に元気づいた。」(p.305)というように、苦学する自己を特別な存在として意識し、他者と差別化する心性である。この見栄や虚栄心は嫌悪する父親と同等のものであるということまでは文子の意識に上っていないが、この内なる見栄や虚栄心の存在を明らかに文子は見つめている。

要するにこれはまだ虚栄心を取り去り得ないからだと自分で自分を励ましてみたりなんかしてみたが、それも何らの効がなかった。(p.326)

ただ、主家に気に入られたいばかりに同僚のおきよさんにはこうそりと早くから起きて、おきよさんが起きて来た時分にはもう一通り食事の準備も出来ているようにしたり、(中略)自分はただの女中でないということを示すために、わざと学校の話をしたり、数学のノートを見ては「ここ違ってるわ」など

と見栄を張ったりした (p.349)

この見栄や虚栄心は実はこの後もずっと文子に巣くっていたもので、獄中においても意識されている。獄中手記『何が私をかうさせたか』と同じく、同志の栗原一男が獄中で文子が詠んだ歌をまとめて刊行した歌集『獄窓に想ふ』¹⁰の中には次のような歌がある。

ヴワニティよ我から去れと求むるは只我ある
がままの真実

このように獄中においても文子の意識に飛来し、そこからの脱却を求めた見栄や虚栄心とはどのようなものであったのだろうか。それは関東大震災の際、保護監察の名の元に朴烈と共に拘束され、爆弾発注の件が露見した時の金子文子の行動と大きく関係していると思われる。次にこの点について検討してゆきたい。

【爆弾入手計画—獄中の虚栄心とその脱却】

朴烈と共に金子文子が拘束された後の第二回予審から第五回予審において、文子は生まれてから朴との共同生活に至るまでを語り、そして、当時の思想—虚無思想—について説明した。その中で日本の国家社会制度についての認識を問われると、国家組織を第一階級の皇族と、第二階級とみなす大臣その他政治の実権者、第三階級を一般民衆と分け、第一階級の皇族とは、政治の実権者たる第二階級が無知なる民衆を欺くために操っているかわいそうな傀儡、木偶であると述べた。文子はこの第一、第二階級に爆弾を投げようと考え、1923年頃、朴と相談の上、金翰¹¹を通じての上海からの爆弾入手を金重漢に依頼したと述べている¹²。

しかし、後の1926年2月26日の大審院第一回公判では金子文子は「金重漢¹³との関係は朴が単独に交渉したので、同人に関しては本当に知らないのです」と金重漢が関与する爆弾入手計画への関与を否定している¹⁴。実際、文子がこのことを知ったのは、朴烈が上海行と爆弾入手の依頼を取り消したことにより朴と金重漢の間にいざこざが起こった1923年8月11日の不逞社例会の席上であったと考えられる。とすれば、文子が金の

上海派遣計画に参加したということはありませんのである。

ではなぜ、文子はこのような虚偽を語ったのか——。それは山田昭次も指摘するように¹⁵、同じく拘束された新山初代に爆弾入手の尋問がこれ以上及ばないようにするために文子が刑罰を受けようとした、と考えられる。しかし、それだけではなかったはずだ。自分を置き去りにしてこのような計画が遂行されようとしていたことに文子は驚きと共に憔悴を感じたのではなかったか。言い換えれば、自分の存在が無視されたことへの失意である。結局、新山初代と朴の意識の齟齬によってこの計画が文子に露呈したのだが¹⁶、文子にとってみれば、朴にとっての自分の存在の軽さを知らされたようで、一抹の寂しさを感じたのだと思われる。自分を計画の最前線に置きたいと考え、自分は朴と同じくこうした計画には不可欠な存在だと自負していたのに、それを裏切られたように感じたのではないだろうか。このような文子の心理が事実とは異なる主張をもたらしたと思われる。すなわち、文子も当初からこの計画に関わっていた、という主張である。こうした心性にこれまで指摘してきた文子の見栄、虚栄心という言葉当て嵌めることも可能なのではないかと論者は考える。

しかし、冷静に考えてみれば、この計画自体がまだ用意周到なものとは言えず、明らかに時期尚早で危険を伴うものだった。その計画に関与していたと公言したことで文子は爆弾入手計画に参画したとして大逆罪という大きな罪科を問われることになるのである。山田昭次が指摘するように、文子が悩んだのは「自分の意志が関係しない第四次爆弾入手計画の失敗により自主的な行動決定の可能性が失われたこと」¹⁷であったろう。文子自身は次のように書いている。「私の身内には、過去の苦しい境遇に鍛え上げられた力強い生命が高鳴って居る。私は、自己の意志なき失敗の犠牲などになりたくない」と¹⁸。そして、もし、朴が金翰のことを文子に相談したらどうだったのかということも考えている。文子は次のように答えを出す。

若し其の時朴が私に金翰兄との事を相談したと

仮定して、私が果たして反対したかどうか疑問だ。いや、怖らく信頼して任せよう¹⁹

つまり、朴からの相談があっても同じ結果になっていただろう、と考えたのである。何故なら文子が朴と同じ大逆の思想を持っていたから、である。

私が過去に於て又現在に於て、大逆の名を以て呼ばるべき思想をもって居た、又もって居る。そして其れを実行しようとした事もある。尚、自分のそうした言動に、反省する余地はない、²⁰

とも語っている。文子は人間の絶対平等を掲げ、それと対峙する天皇制を否定する。その思想を実行するためには金重漢は危ういところがあると感じられ、爆弾入手計画を任すには注意が必要であった。それにも関わらず、朴は金に依頼し、結局その計画が現実化せず、更にこの爆弾入手計画が朴と文子で大逆罪へと追い込んでいたのである。

この間の事情について、文子が第一回公判の夜に執筆した「二十六日夜半」には次のようにある。

其の時朴は私に相談しなんだ。全く自分の独断でやった。で、つまり私にして、外の事情から見れば、全く、他人の過失の犠牲になる訳だ。が、さうと知りつつも、金翰兄との交渉中、尚私自身を省みて、さうした計画を生む思想をもって居るが故に、犠牲にならうとして居る自分を救い出すことが出来ない²¹

他人の過失にも関わらず、同じ思想を持つ同志のために自分も罪をかぶることになる、つまり、犠牲になる自分をあえて受け入れようとする文子がいる。自己の自律的な決断ではないところの結果を背負う文子は悔しかったであろう。しかし、大逆の思想を持っているが故、その経緯は不問に付し、ここに堂々とその刑罰を受け入れようと考えを変えたことがわかる。

この時、文子は自分の内なる見栄や虚栄心から脱却しえたのではないだろうか。朴から一人取り残されたからではなく、また、仲間をかばうために積極的に虚無思想家を演じるのでもなく、自己の思想を再確認し、自らの思想故に選び取った罪を受けようとしたのである。文子は最後にこ

のように書いている。「私は朴を愛して居ります。朴と共に死にます。自分は犠牲になることを後悔するものではありません²²」。犠牲になること、つまり、自己の意志とは異なるところで他者のために自己を犠牲にするのではなく、自らの意志に基づきこの大逆の思想に科せられた罪に対峙することを表明しているのである。そこには文子の見栄や虚栄心によって裏打ちされた朴、金の擁護ではなく、自らの主体的な思想表明により、人間の絶対的平等を阻む天皇制への反旗を掲げる人々との連帯する意識が表明されていると考えられるのである。

【終わりに】

金子文子の人生を振り返った時、それは無籍者の悲哀を味あわされた父母の性や運命論、見栄、虚栄心への嫌悪や反発と、そこから脱するための格闘であったといえるだろう。しかし、それらは文子の奥深くに潜んでいるものであり、文子の人生はその内なる敵を克服する過程でもあった。不条理な現実を生きる中で、性の本能に翻弄されて男のおもちゃにされることから脱し、また、運命論に依らずに主体的に生きようとしたのが文子であった。ただ、文子が運命論者に共通すると認識した見栄や虚栄心からの脱却は難しかったと言える。爆弾入手計画の発覚により獄中に囚われても尚、その発言にはいわば虚無主義者としての面子に捉われた部分があったのではないかと考えられることを指摘した。自らの発言によって窮地に立たされ、苦しむことになった文子はその苦しみからの解放されたのは、「私は私自身を生きる」という屹立した自我の獲得に依る。「私は私自身を生きる」「人間の絶対平等」という自らの思想を確認した時、文子はこの爆弾入手計画も、その失敗もすべて自らが選んだ道として肯定、受け入れるのである。本論はこのような金子文子の歩んだ精神的な軌跡を、わけのわからぬ力、運命、見栄、虚栄心という言葉を読み指標として辿り直したものである。

【謝辞】

本論は科学研究費補助金、基盤研究（C）、2019～2021年度、課題番号19K00533『『人間の絶対平等』を目指した金子文子の思想と文学の総合的研究』の成果の一部である。記して御礼申し上げます。

【注】

- 1 2017年、イ・ジュンイク監督による韓国映画。朝鮮と日本で活動した朴烈と、彼に共鳴した日本人の金子文子を描いたこの映画は、韓国では235万人を動員した。2017年の大阪アジア映画祭でオープニングを飾り、日本では「金子文子と朴烈」のタイトルで2019年2月から劇場上映され、反響を呼んだ。
- 2 春秋社、1931年
- 3 山田昭次「金子文子と吉野作造の朝鮮観—近代日本の朝鮮観把握の方法の深化のために—」（『朝鮮史研究会論文集』朝鮮史研究会編（通号36）pp.5-23、1998年）
- 4 李順愛「日本女性と天皇制」（『女・天皇制・戦争』鈴木裕子・近藤和子編、オリジン出版センター、pp.82-83、1989年）
- 5 金子文子の山村生活については、安元隆子「金子文子『何が私をこうさせたか』に描かれた山村」（『東アジア日本語教育・日本文化研究』19号、pp.71-89、2013年）を参照されたい。
- 6 金子文子と元栄の交渉についての考察は、安元隆子「金子文子の形象化を巡って—瀬戸内晴美『余白の春』論—」（『日本大学国際関係学部研究年報』40号、pp.11-21、2019年）を参照されたい。
- 7 金子文子とクリスチャンの伊藤との交際については、安元隆子「金子文子の東京生活」（『日本大学国際関係学部研究年報』39号、pp.15-25、2018年）を参照されたい。
- 8 第一期国定教科書「尋常小学修身書」第四学年

- 9 大逆事件で死刑となった宮下太吉は「神と思われている天皇もわれわれ普通の人間と同じく血の出るものであるということを知らせ、天皇に対する迷信を打ち破ろうと思い、」(『特別裁判一件書類』の「初二冊」と言い、また、同じく菅野スガは「天子」は「思想上では迷信の根源になっています」と語っている。幸徳秋水は獄中で書いた『基督抹殺論』を通して、キリスト教徒が史実とするキリストやキリストにまつわる話は「迷妄」であることを明らかにしようとしたが、実はキリスト教と同時に天皇制の虚偽を明らかにしようとしていたと考えられる。また、幸徳はトルストイの「日露戦争論」を翻訳したが、トルストイも日露の強権を「superstitions」すなわち「迷信」という語で表現しており、幸徳秋水はこれをそのまま「迷信」と訳している。こうした時代背景の中で、石川啄木は「この島国の子供騙しの迷信と、そこの見栄すいた偽善」という言葉を「時代閉塞の現状」に記している。
- 10 金子ふみ子『獄窓に想ふ—金子文子全歌集』(黒色戦線社、1987年)
- 11 ソウルの無産者同盟委員。1922年9月、朴烈と面会している。また、同年11月に朴烈が再びソウルに赴き、義烈団から送付予定の爆弾分与を依頼している。
- 12 金子文子の第三回被告人尋問調書(大正十三年一月二十二日、東京裁判所)、(『朴烈・金子文子裁判記録』pp.18-19、黒色戦線社、1977年)
- 13 金重漢は不逞社同人。金重漢と朴との爆弾を巡る主なやり取りは次の通り。
1922年11月、朴烈ら在京朝鮮人無政府主義者は黒友会を組織し、朴烈はソウルに行き、金翰に義烈団から送付予定の爆弾分与を依頼した。1923年1月、義烈団員がソウル鍾路警察に投弾したことで金翰が逮捕され、朴烈の計画は挫折した。同年4月、朴烈と金子文子は不逞社を設立。ソウルから来た金重漢が朴宅を訪れる。5月、朴烈は金重漢に爆弾入手のために上海に連絡に行くよう依頼。6

月、朴烈はこの依頼を取り消す。8月、不逞社例会で、金重漢は朴烈への不満から短刀を振り回して喧嘩となる。

- 14 『朴烈・金子文子裁判記録』(p.688、黒色戦線社、1977年)
- 15 山田昭次はその事情について『金子文子 自己・天皇制国家・朝鮮人』(影書房、1996年) pp.154-159の中で詳しく述べている。
- 16 新山初代は、朴烈が自分は手を汚さず金重漢や新山を利用して秋に爆弾を投げつけさせ自分は逃げるつもりには違いない、卑怯で野心家だと文子に訴えている。新山はこうした認識を金重漢に伝え、それが金重漢と朴の喧嘩に発展したと考えられる。
- 17 山田昭次『金子文子 自己・天皇制国家・朝鮮人』(p.179、影書房、1996年)
- 18 注12 (p.745)
- 19 注12 (p.743)
- 20 注12 (pp.746-747)
- 21 注12 (p.743)
- 22 注12 (p.689)

【主要参考文献】

- ・金子文子『何がわたしをかうさせたか』春秋社、1931年
- ・金子文子『金子ふみ子獄中手記 何が私をかうさせたか』黒色戦線社、1972年
- ・『増補新版 金子文子 わたしはわたし自身を生きる』梨の木舎、2013年
- ・『朴烈・金子ふみ子裁判記録』黒色戦線社、1977年
- ・山田昭次『金子文子 自己・天皇制国家・朝鮮人』影書房、1996年
- ・山田昭次「金子文子と吉野作造の朝鮮観」『植民地支配、戦争、戦後の責任』創史社、2005年
- ・鈴木裕子、近藤和子編『女・天皇制・戦争』オリジン出版センター、1989年
- ・後藤守彦『只、意志あらば 植民地朝鮮と連帯した日本人』2010年、日本経済評論社
- ・朴慶植『天皇制国家と在日朝鮮人』社会評論社、

1986年

- ・金廣植「金子文子の思想形成に関する研究」『日朝関係史論集』新幹社、2003年
- ・瀬戸内晴美『余白の春』中央公論社、1972年